

## 梅園の論理思想

三枝博音

### 一 はしがき

今から一六〇年ばかり前に、『玄語』というわが思想史上画期的な著述が完成された。著者は三浦梅園である。それは、その字数「十余万言」といわれているほどに、大部の著作である。稿を改められたことが二十三日度といわれ、完成までに二十数年を要している。その草稿のかなりの部分がなお保存されている。その中、特に論理学的に困難な部分の書き換えの草稿のみでも五〇綴が現存している。その草稿を仔細に検べてみると思索の苦心の痕が歴然としている。彼は叙述を補うために一六〇余の図をも付している。尚、この書の中には、他人の学説や文章は引用するところが更でない。論理学のなかった日本人の思想史の上では、この人とこの書を措いては、日本人の論理思想を語ることはできないほどである。

彼の論理思想を知るには、『玄語』の外にこれと同じように大著というべき『贅語』を注意せねばならない。彼の論理思想が単なる思弁から来ないで、自然的知識から来ていることは、『贅語』でもって保証されている。さて、この思想家が学界に見出されたのは、明治三十二年(一九一九)に東京帝国大学が、『玄語』の自筆本の一つを三浦家から借覧してより以後のことである。その後これまで梅園について述べられたことは少なくないが、

彼の学問について論述されたものは少い。<sup>二</sup>彼は儒教的教養から成長したが、いわゆる儒者ではない。彼は日本の近代的学的思潮が生んだ一人の思想家である。日本の近代的思潮なるものは、その発達が中国及び南蛮からの移入文化の直接又は間接の影響によるところがあるのであるが、それとは別に、日本の学問思潮は今日からみて、やはり一つの「近代的発展」をなしつつあったといえる。それは日本の儒教及び医学の発達の中に見えている。私らが古学派及びこれの影響下にあった医学の発展を重要視するのはこのためである。梅園はそういう思潮の中に成長したのである。そうではあるが、彼は彼以前の日本の学者の中に、その型を見出すことのできない思想家である。梅園の時代になると、この型の思想家を他にも見出すことができる。<sup>三</sup>安藤昌益<sup>四</sup>(一七〇〇年代の中葉が彼の活動の全盛期である)と皆川棋園とが先ず挙げられねばならない。昌益は自分の立てた新しい思想を『自然真営道』<sup>五</sup>と呼んだ。皆川棋園が特に自分の独創と考えた彼の学問思想は「開物之学」ということにあつた。<sup>六</sup>この両者の唱えた思想は「自然」や「物」に関したものであつて、それだけで、いわゆる前代未聞のものであり、よく「近代性」を示しているのである。これらと並んで、梅園が創唱したものは「条理」<sup>七</sup>という学問であつた。条理なる語は、梅園にはじまらない。彼以前にも学者の間に用いられている。<sup>八</sup>事物の間に必ず条理があるという考えは、必ずしも新しくないが、その事物そのものを経験に訴えてさぐるという学的態度は、梅園を俟<sup>ま</sup>って特に学風を形成するようになったのである。

### 註

- 一 西村時彦氏の「三浦梅園」(明治四十三年刊行の『学界の偉人』所収)や、土屋元作氏の「三浦梅園の玄学」(明治四十五年刊行の『新学の先駆』所収)、及び『梅園全集』(明治四十五年刊行)の諸々の解説等。

- 二 小柳司氣太氏の「三浦梅園」（昭和十年刊行の『東洋思想の研究』所収）の外に井上哲次郎氏の梅園に関する論文が書かれてある筈。筆者の梅園研究の一端は『日本哲学全書』第八卷に載っている。
- 三 筆者の論文「わが国自然哲学の曙光」（『日本の思想文化』所収）中で梅園と昌益との或る共通性が考察されている。
- 四 『日本哲学全書』第九卷所収『自然真営道』及びその解説を参照。
- 五 同上第九卷所収『易学階梯』及びその解説を参照。
- 六 彼の著述『易学開物』は注目すべき思想の書である。
- 七 『日本哲学全書』第八卷所収『玄語』及びその解説を参照。
- 八 山鹿素行の『聖教要録』の中には「条理ある、之を理という。事物の間必ず条理あり」とある。

## 二 梅園の条理学

梅園において論理思想が起るようになったということ述べるには、梅園より以前の思想家の方法について述べて置かねばならない。梅園以前で思索に長じていた人といえば、江戸時代では禅僧の沢庵、中江藤樹、荻生徂徠などを挙げねばならないが、この人々は、それぞれの思想伝統を固持していて、その範囲で思想体系を作りあげている。けれども、自然界に関する関心と知識的要求とは殆んど見られなかった。梅園はこの二つの点で全く異っている。これまでの儒は「儒中に相闘せめぎ」これまでの仏は「仏中に相毀こぼつ」ものであり、諸子百家も亦そうであつたではないか、というのが従来の人々の思想方法に対する梅園の批判である。

次の文は、『玄語』の序論の一節であるがよく探求者の精神を示している。曰く「人諸これを古に聞き諸これを書に得れば、便すなわち言ふ。晋〔梅園〕は則ち未だ全信すること能あたはず。天地に於けるや、荒唐散漫として説く。死

生に於けるや、恍惚曖昧として言ふ。験を僻に取り、舌を空に懸く。人は則ち意に介せず。晉は則ち憚然たること能はず。反覆して之を思ひ、沈潜して之を繹ぬ」と。実に彼の自然認識への要求の切なるものは、従来思想家と断然たる懸隔を示している。「惟天地と合するを求めて、而して定説を顧みるに暇あらず。惟冀ふ人の習する所に病まず、以て向ふ所に活し、而して之を是非するに天地を以てし、之を取捨するに天地を以てし、門戸を護し、区域を画し、他の賢哲を禦ぎ、而して、此の赤子を外にせざらんことを」。思想の準拠を自然界（天地の間）に求めるということについては、梅園は彼の著述の中で、何度か繰返している。梅園において、思想の方法が格段の発達を仕遂げているのは、彼が自然及び社会へと知識の要求を向けたからである。社会に対しての知識欲は、歴史への深い興味と経済への関心の中にあらわれている。彼が郷土の歴史に詳しくかつたことは、随筆や日記に見えており、経済に關してのそれは、彼の秀拔なる経済論『価原』なる著述が物語っている。このような梅園の学的態度は、当然に彼に新しい思想方法を生んだものと考えることができる。彼に至つて、学問のためには、必ずしも「古と計校せず」ともよく、いつでも「則を天地に取る」べきであるという、いわば経験を重んずる態度が、漸く確立するようになったのである。

彼の論理思想は彼の条理学にあらわれている。条理学という名は梅園のはじめたものではない。彼の弟子に、矢野弘という人があつて、この人が『条理余譚』なる著述の中で、はじめて条理という一連の思想を条理学と呼んだのである。彼は、「条理学ハ天人（今日の言葉で言えば、自然と社会の意）ノ全体ヲ見ルガ為ノ規矩準繩ナリ」と言っている。条理そのものについては、梅園が屢々彼の著述の中で述べている。条理のことに考え及ぶようになったのは、二十九歳の頃であつたらうと考えられる。彼が京都の高葛坡に送つた手紙（安永

五年（一七七六）四月）の中に「歳二十有九。始有<sup>リ</sup>觀<sup>ル</sup>于<sup>レ</sup>氣<sup>ヲ</sup>。漸知<sup>三</sup>天地有<sup>ニ</sup>条理<sup>一</sup>」と書いている。これでもわかるように、「氣」の解釈は彼の条理の学にとって重要な問題である。それでは「氣」の解釈は如何なる学問の伝統から発展したか。梅園の学問的態度が經驗的になって来て、法則を自然界に対する認識から汲みとろうというようになったのは、その刺戟は内には日本の「近代的」学問の発達と、外には西洋の科学思想の間接的影響<sup>四</sup>によるのである。随筆であるが梅園の『帰山録』<sup>五</sup>を読むと、ひとりの学者が西洋の広汎な近代科学から打ち寄する波を如何に身をもつて感じつつあつたかを、知ることができる。けれども、じつさいに梅園が条理の学を立てるには、その資料を西洋に仰ぐことは、時代が許さなかつた。やはり、中国の学問が内容上基礎となつたのである。中国の学問のうちでは、主として古くは易思想、新しくは南蛮を通じて中国に成立したところの天学である。前述の手紙の中に、「年、弱冠を過ぎて始めて、『天経或問』を読むようになった（和文訳以下同じ）と書いているのは、恐らく長崎の西川如見の労作を通じて『天経或問』を読むようになったためであろうと察せられる。梅園の書きとめている読書ノート<sup>六</sup>を見ると、延享三年（一七七四）（二十四歳）に『天経或問』を読み、抜き書きをしている。『天経或問』の知識では、彼の自然認識への欲求は充たされることができなかつたのであろう。「雖<sup>ドモ</sup>形体有<sup>リ</sup>所<sup>ト</sup>徴<sup>スル</sup>、地体此の如く、天行此の如しと言ふに過ぎず。則ち唯、様に依りて、胡蘆を画くのみ、向き<sup>キ</sup>に喜ぶところは、疑ふ所に益なし<sup>七</sup>」と述懐している。これでもわかるように、彼は刺戟をいわゆる西学から受けているが、学問的知識は中国の学問に負うているのである。

「氣」の論については、彼は『易経』の説くところが正しいものと考えたように思える。条理の学が主として易に負うていることは、彼が「庖犧氏の後、我未だ能く陰陽を述ぶる者を見ず」という自信ある言葉から

も知れる。しかし後代の解釈、殊に朱子の解釈を斥けている。梅園の氣の論の特徴は弁証法的なる点にある。そして又彼の条理の学が弁証法的である。彼において論理思想の発達を指摘するのは、懸ってその条理の学の中の弁証法的性質にあるのである。いったい『易経』そのものが弁証法的である。『易経』の最近の研究では易の思想は老子及び孔子にもとづくという説が有力である。『老子』の中に弁証法的思惟の盛んに見えていることは、ここに述べるまでもない。思想家孔子においても同様である。さて、条理の学で易思想から梅園が汲んだ知識は、恐らく彼にとつて支配的なものであつたのであろう。しかし、梅園における弁証法的思想の発達はあまりにも顕著である。

「氣」については、彼は『元熙論』の中で特に論述しているが、「氣」の論が彼の学問の根柢をなすというに相応しいほどに徹底した論をしてはいない。『元熙論』は小著で且つ解り易いが、彼の学問思想を語るに足るものとはいえない。やはり、彼の主著であり且つ大著たる『玄語』と『贅語』に依らねばならぬ。彼の著述の全体からみても、「氣」の論が特に基礎論をなすわけではない。「氣」を語るには必ず「物」を以つてせられ、「性」を語るには必ず「体」を以てせられるというのが、彼の学問思想の特徴である。

## 註

一 安永五年高葛陂（「こうかつば」と読むということである）への梅園の手紙。葛陂は号で、名は峻、字は伯起といった。帰化人で、その先は明の榔郡の人であるということである。儒者であるが、著述についてはわからない。この手紙は全集の『贅語』の巻末にある。参照すべき資料である。

二 『価値』は金銀と物価との関係を説いていて、彼の経済に関する深い洞察が今日称揚されている。『日本哲学全書』第

十卷参照。

- 三 写本であつて、三浦家に蔵せられている。矢野弘は少年の頃から梅園の薫陶をうけた。この書の中には「境」が説かれていますが、聯関についてよき理解を示している。それは梅園の「全」なる思想の影響であろう。
- 四 梅園は二十三歳の時、長崎に遊び、当時の「舌人」を通じて、西洋の学問の雰囲気に触れていたのである。
- 五 『日本哲学全書』第八巻に収択。
- 六 梅園は少年の頃から、読書の後でノートを作っていたらしい。今日残っているものは二十二歳以後晩年に至るまでのものである。
- 七 高葛陂への手紙。
- 八 郭沫若氏の『易の構成時代』（二九三五年三月）参照。

### 三 驚嘆すべき独創的見解

「氣」の論が梅園学の根柢にあると考えて、彼の哲学思想は「氣」又は「玄氣」の一元論であるというように見る人があるが、これは正しくない。少くとも一氣が根本で、これから万物が生ずるというような觀念論の痕は見られない。尤も、数の一、統一性としての一、これらの「一」についての思索は彼にとつて魅力あるものであつたらしい。「一は数へずして足る。故に之を剖きて破る可からざるに至るも、猶一を尽さず。之を加へて載す可からざるに至るも一に至らず。故に強ひて命じて一元氣と曰ふ。一を挙げて一を闕ふ。具を言ひて闕を見はす。故に玄と曰ふ」。「玄」の一元論というようにとれないではないが、しかし「玄」が最根本的なものともいえない。「玄」は、ヘーゲルのいえばむしろIdeeであつて、Ideeとしての「玄」の外になお Geistとしての別のもの（後述）が更に考えられているからである。これらの問題を更に進んで総合的に考え

てみねばならない。

彼が「物」といつている概念は、今日吾々が用いている物の意味と異ならないが、「氣」は大いに吾々の理解を要求している。「物」は經驗的なものであるとして差支ないが、といつて「氣」はア・プリアリといったものであると見てはならない。それには彼には「理」の思索があつて、この方がむしろ經驗的なものに対立したものである。「氣」は「物」と対立してはじめて意味のあるものとなつてゐる。「氣」をいへば必ず「物」をいうことになつてゐる。「往く」として氣に匪<sup>あら</sup>ざるなく、往くとして物に匪<sup>あら</sup>ざるなきなり」というのが、彼の説である。「氣は散を以て体を虚にす。無体に非ざるなり。物は氣を以て実を結ぶ。氣ならざるに非ざるなり」。「散」の対立語は「統」である。氣はそこにまとまつて（統）存在してくれないから、無体のようにとれるが、体なる意味を以ていないものではない。「物」は少くとも「氣」ではないと考えられるが、「物」が虚でなく実であるのは「氣」のためである。梅園の「氣」は、林羅山以後に発達した宋学の理氣論<sup>三</sup>における「氣」とは異つてゐる。彼においては、理・氣の対立はさほど意味のあるものとは見られないで、「氣」は「物」と対立し、「理」は「故」と対立してゐる。「今の理を譚する者は、理を以て氣に易<sup>か</sup>ゆ。氣は没すべからず<sup>四</sup>」。理とはまさに然<sup>しか</sup>あるべきもので、一般的で且つ明瞭のものである。理が理であるのは、じつさいに geschehen するものがあるがためである。この考え方は、カントやヘーゲルに強く働いてゐる思想である。実際に故があつて（故は理ではない）実在するものの側が、故なる概念で理解されている。「故者其所<sup>ハ</sup>然<sup>ル</sup>。理者其<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>然<sup>ル</sup>」なのである。「理」は以て然<sup>しか</sup>るものなので、「昭々<sup>トシテ</sup> 非<sup>ズ</sup>暗之所<sup>ニ</sup>蔽<sup>フ</sup>」といったもので、「故」は「冥々<sup>トシテ</sup> 非<sup>ズ</sup>明之所<sup>ニ</sup>照<sup>ス</sup>」といったものである。そう考えると、「故」は興味ある思想である。彼は「故」を「跡」というように見ている。



geschehenするものを「痕」又は「跡」と見る思想は儒教の中にすでにある。とにかく、理論は明朗であるが、歴史的事実の進行はむしろ陰然たるものであること、識者の知るところである。「理」と「故」との関係の理解はもつと幾分詳細なのであつて、弁証法的である。「理」と「故」との対立と同じ対立は、「理」と「氣」との間にも見られるのである。「理者天也。事物之以然也」といい、「氣者神也。事物之為然也」といつている。この言い表わして見ても、昭々たる「理」と冥々たる「氣」との対立的意味はうかがわれるのである。

ここまでくると、私はカントの意識一般と構想力との対立的意義を思い起すのである。<sup>五</sup>日本ではカントの『純粹理性批判』におけるこの根本問題は十分研究されているとはいえないのであるが、それはカントにおける最も重要な問題であることは間違いない。<sup>六</sup>カントにおいて意識一般は統覚 (Apperzeption) であり、結合一般である。一切の存在、一切の意味あるものは、これを離れることはできない。しかし、それだけに「天」の如く昭々たるもので、そのみでは、歴史的事実を如何ともすることはできない。この「天」に対立するものを、梅園は「神」と呼んでいる。「神」とは Gott ではない。彼には神の考えは存在しない。梅園の学問では「然ら使むる」という自然の意義についての思索が入念であるが、「使むるは神の貌」であると考えている。「神」をかかるものだと理解する限り、カントの構想力を思い合わせることに必然に異議をさしはさむ人はいないであろう。梅園は空間（「処」又は「居」といつている）を考え時間（「時」と呼んでいる）を考えているが、「時」を「神」に結びつけている。「処は物を容れる者」であつて「時は神を運する者」である。このような思惟からいうと、彼が「神」というものの中に、カントのいわゆる「構想力」(Einbildungskraft) の概念に相当するところのもののあるを見るは、当を失しはしないであろう。カントの「構想力」では、Zeit (時) は最も重要な

意義をもっている。梅園は「理」に対して「勢」をあげているが、「勢」も又「神」の側にある概念でなければならぬ。カントにおいての *Zeit* の問題を含む構想力が規定力をもっているように、「勢」は規定力をもっている。<sup>八</sup>

#### 註

- 一 『梅園全集』上巻五三頁。
- 二 『日本哲学全書』第八卷一〇七頁。
- 三 林羅山の『三徳抄』、貝原益軒の『大疑録』参照。
- 四 『梅園全集』上巻五三頁。
- 五 『純粹理性批判』の「先験的分析論」
- 六 「カントの読み方」(『日本における哲学的觀念論の發達史』収録)
- 七 『元熙論』参照。
- 八 『梅園全集』上巻四九頁。

#### 四 その論理思想の要点

かようにして、梅園では一語たりとも、その対立概念なくしては、意味をもたない。対立の論理思想は彼の思索の全体を貫いている。はじめは先ず漠然たる区別なるものを考え、これと差別(梅園では「比」)なるものとを区別し、更にそれが、「反対」又は「対立」、更に「矛盾」の意義をもつ場合を考えたのは、ヘーゲルである。このことは弁証法的思想家にとって必然のことである。梅園は「対に反あり、比あり、互あり、汎あ

り。彼此相証するものあり。審しまひらかにせざれば則ち失せんと。是れ斯の語〔玄語〕の文法なり」といつている。詳述はここに省かねばならないが、真の対立は比でなくして、反でなくてはならない。「比」では「彼此借に有る」のみで、並立にとどまつている。反にしてはじめて弁証法的である。合うということと分つということの対立は彼の叙述のすべてに顧慮されている。「分れて反す。合して一なり。是を以て反観合一なり」。反観の法はかくして条理の学の骨子である。

私が特に彼の論理をヘーゲルに比するものは、梅園の反観の法の中には、ヘーゲルのいわゆる悟性的契機が顕著であるからである。反するというとき、真に反対し対立するものでなければ、弁証法的ではない。「至つて合する者は、便すなわち至つて反する者なり」<sup>一</sup>或は又「一徒いたづららに一なれば、分合せず」ともいつている。このよ  
うな言い表わしは『玄語』の中にいっばいである。日本の思想家の中で、彼ほど弁証法的である人は見出されない。人はいくら知識が博洽はくごうで聡明であつても「反観の門」よりしないものは真理を知ることとはできない。これまで思想家が弁証法的でなかったのは、弁証法的運動に暗かつたからである（「古人終つひに条理の原を探窮すること能あたわざるは、運為うんゐ変錯、目之が為に眩するなり」）。梅園からすれば、普通の人の概念の仕方が不徹底のためである。「事物の然しかる所を知らんと欲せば、則ち水を観て水となし、火を観て火となし、幽を見て幽となし、明を見て明となすべし。宜よろしく对待をもつて反観すべし。宜よろしく一々に就いて剖析すべし。晉〔梅園〕無む似じなりと雖いへども、竊ひそかに茲こゝに見ることあり、其の確乎として固執するは、徴、天地にあればなり」<sup>二</sup>ここに現われている彼の牢乎たる確信は、思想家の態度として称揚し欽慕すべきものではあるまいか。

読者はすでに、梅園の弁証法は、単に觀念論的思弁にもとづかずして、自然弁証法であることを、推知され

たであろう。「对待は天地の条理」であり「配当は人為の処置」であることを彼は明瞭に認識している。「条理は天地の準」であることは彼の確信である。読者はこれについては『玄語』の外に『贅語』の中の「天地訓」の序、及び「陰陽訓」等に注目せられねばならない。

尚、次に梅園の論理思想を知るには、閑却されてはならぬ諸項を挙げて置こうと思う。

(1) 梅園の学問の中にはすでに認識論的業績が含まれている。『玄語』の巻頭に読者は次の言葉を見出されるであろう。「蔽は必ず明に由る。塞は必ず通に由る。一一の態、然らざるを得ず。蓋し人の生たる、必ず習する所に染む。習する所に染めば、則ち其の素なる所を失す。是を以て俗習の蔽は学之が砒鍼をなす。学習の蔽は殆ど葉石を擲つ。之を染むるや易し。之を素にするや難し。之を蔽ふや易し。之を復するや難し。夫れ因循薰蒸の久しき、猶、臭人のその臭を臭とせず、屠人の其の羶を羶とせざるが如し」。学の蔽を説いて、これを素に返そうとする努力は、認識論の根本問題でなければならぬ。『玄語』はこの課題を重要な課題にしている。

(2) 人は万物の尺度であるという思想は、ヨーロッパ人の思惟の歴史における伝統的遺産であった。知識人はこの思想の中の問題をもっていなければならない。梅園は「蝙蝠常好倒懸。如自蝙蝠觀之。則物皆為倒状」ことを言つて、「人」と「万物」との認識論的主・客の問題を展開している（『贅語』身生篇）。この如き反省も亦梅園における特徴である。

(3) 条理とは二つの意味をもっている。すじめの立つていること、従つて又形式論理学的法則性をも意味する。尚、一般に明瞭な法則のあることを条理といっている。いわゆる科学的知識は条理である。梅園が、「西

洋ハル頗ル從フ「条理ニ」<sup>二</sup> というはこの意味である。次に、条理は反観を意味するものであつて、弁証法的なものを指していつている。彼が「斯の書（『玄語』）の業は、条理にあり」という場合はこれである。或は又「西人条理を未だ講ぜず」というのも、第二の意味の条理である。かく二義あるは、劃然と分れ鋭く対立するもの（第一の意味の条理）がやがて渾然と合一するのであるからである。

(4) 梅園の「条理の原」を知るには、前述の氣・神、理・故、物・氣等の対立の外に、混・粲、没・露、精・麤、活・立等の諸対立とその場合場合の意味とを知らねばならない。これらの問題にはこの短い論文では触れることができなかつたのである。

### 註

- 一 『梅園全集』上卷八三頁。
- 二 『日本哲学全書』第八卷一一三頁。
- 三 『贅語』第三帙「身生篇」（『梅園全集』上卷四三三五頁）

- 『三枝博音著作集』第五卷「三浦梅園・日本文化論」（一九七二年十月、中央公論社）所収。
- 理解を助けるために割注をつけた。
- 底本にある振り仮名の他に、読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}^{\text{p}}\text{d}^{\text{m}}\text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。